毎日新聞 2012/7/5
〔第3種郵便物認可〕

農村の豊かさ伝えたい

チャレン人（じん）

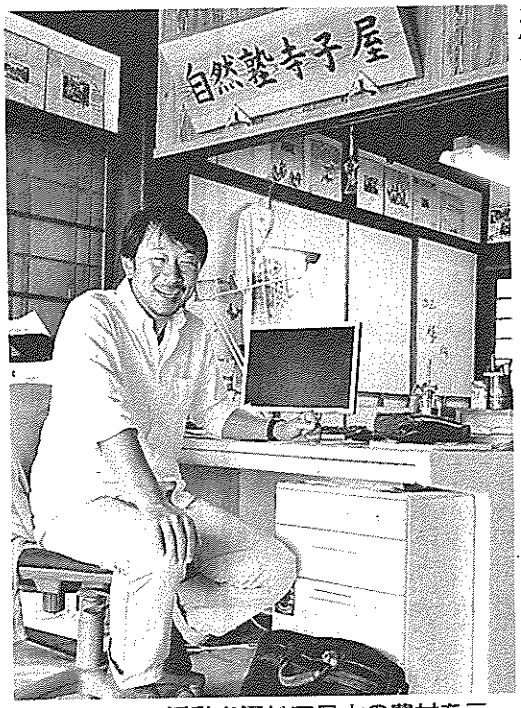
NPO法人自然塾寺子屋理事長
矢島亮一さん(47)

甘楽町の農村地帯に田畑を借り、国際協力機構（JICA）の外国人研修生への農業技術指導や青年海外協力隊員の技術補完事業を10年以上続けている。甘楽町で農業を学んだ若者たちが世界を舞台に活躍し、再びそれぞれの地域に戻って農村振興にかかわっていく。そんな出会いと経験のサイクルを作りたいと活動する。

理事長を務めるNPO法人自然塾寺子屋。1年に数回、3カ月単位で、海外派遣を控えた青年海外協力隊員がやってくる。富岡市の宿泊施設に泊まり込み、毎日、甘楽町の農家に通い農作業を手伝う。技術だけでなく、人付き合いや農村生活の中で培われるたくましさが、海外の生活で役立つのだという。田植えや稲刈りなどの農業体験イベントも毎年主催。県内外から大学生が数十人単位で参加する。

矢島さん自身も1999～2001年、同隊の一員としてパナマの農村に単身乗り込み、村の人々に農業技術指導を行った。住んだ家は電気もガスも水道もなく、物質的には貧しい生活。だが、家族や村人同士の結びつきの強さに、昭和時代の日本の田舎に来たような懐かしさを覚えた。

「農村生活ならではの豊かさを、次世代を担う子供たちや若者たちに伝えたい」。帰国後に芽生えた思いが、活動の原点にあるという。09年には、寺子屋で研修しモザンビークから帰国した協力隊員の一人が、甘楽町に戻って農業を始めた。その後も、数人の若者が寺子屋の活動をきっかけに県内で農業に従事しているという。日本の農村と海外をつなぐ活動が、実を結び始めている。【塩田彩】



「寺子屋の活動を通じて日本の農村を元気にしたい」と話す矢島亮一さん＝甘楽町上野の事務所で

やじま・りょういち
高崎市出身。東京農大卒業後、青年海外協力隊員などを経て03年に同寺子屋を設立。